



昭和53年(1978年)

4月号(No. 394)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

- 64年目の名のりあい
(辻 莊一) (1)
- 25年前の「本」
—エヴェレスト登頂25周年—
(田中栄蔵) (2)
- 寸又川流域の山々(石間信夫) ... (3)
- 図書紹介 (3)
- 世界山岳地図集成・ヒマラヤ編
イタリアへの郷愁
- 新ルーム披露パーティ
—3月11日— (5)
- ルーム基金応募者ご芳名(9) ... (5)
- 日本山岳会図書室利用規程 (6)
- お知らせ (6)
- 報告 (7)
- 東西南北 (9)
- 図書受入報告 (10)
- 会務報告・ルーム日誌 (10)
- 会員動向 (11)
- カット/松本慎太郎, 谷アユ子

六十四年目の名のりあい

辻 莊一

昨年の十月のある日、家人が太木さんとおっしゃる方からお電話ととりついだ。その時咄嗟のあいだにすでに物故した作曲家太木正夫君のことを思い出し、何か遺族のかたからのお電話かと考えて受話器を耳にあてた。大変若しいお声であったのでそのつもりでお話を承っている間に、自分は八十六歳だとおっしゃるので驚いた。余談ながら私も声が若いので、直接電話に出ると改めて荘一先生はご在宅ですかときかれることがしばしばある。それで太木さんもお声から推量してお若いと思っていたのに、おとしを承って二度びっくりであった。お話のすじは、お手持の前穂高の頂上での写

真に関すること、そのなかにうつっている人物が辻の一行に相違ないかとお尋ねである。このお尋ねが出たわけは辻がかつて「山」に神河内の旅宿で朝早くから大声でしゃべりあったので、同宿のウエストン師から叱られたこと、前穂高に登ったときには一高の学生が三、四人あとになり、先になりしたことが、ひとり本格的な登山服に身を固め、時々奇声を発してたのしんでいたおひとがあったことなどを書いたのが老台のお眼にとまったからであった。そして老台がおっしゃるには、その一高生のうちのひとりがご自分であり、頂上での写真は自分がうつしたのだと言うことであった。それで日を

期してその写真を見せていただくことにし、山岳会の談話室で落ち合うことになった。

当日私は時刻にすこしおくれで談話室にはいってごあいさつをしたが、これが実に六十四年ぶりの名のりあいである。長生きは恥が多いとも言うが、この名のりあいができるのはまことに長生きのめぐみである。その時には太木さんのほかに一高の旅行部の先輩やその他が同席され、早速写真を見せていただいた。およそ十数人がうつっているが、その中で、ひとり植物採集用の胴乱を前においてすわり、ほかに同じ服装がふたり立っており、そのほかに十名ほどのおひとが写っている。私が当時かよっていた中学校は軍部と関係のある学校を除いて、はじめてカーキ色の服を制服とし、いつもゲートルをつけることになっていたのだ、人眼を惹くことが多かった。恐らく太木さんたちも変な中

学生だなど思われたことであろう。私たちは木曾御岳に登った余勢を駆って神河内に来たので、同道は神田、山崎の両君であり、共に健在である。

そこで頂上のひとたちをアイデンティファイすることになったが、私が「時々奇声を発したひと」と目したのは、ほかでもない、哲学者の鹿子木員信氏であることを教えられた。また恐らく高村光太郎氏ではあるまいかと話しが落ちついた人物もうつっている。今名前を忘れたが一高のひとたちがつれて来た案内者もうつっているが、一高の人たちを除き、数名のお名前にはわからなかった。話がすこし横にそれるが、私は何かの時に「奇声」の主は田部重治さんだろうと話したか、書いたことがあ

た。あとでひとつてに聞いたところでは、田部さんは「自分は山で奇声を発したことは無い」とかなりおかんむりで否定されたので、蔭ながら恐縮した。今になって考えるとその「奇声」は「ヤッホー」であったと思う。まだリュックザックも、登山専用の靴もめったに見られない時代だったから、「ヤッホー」も奇声としかきこえなかった。鹿子木さんはアルプスの山をすでに登り、ヒマラヤにも行かれて、のちにその紀行を残された。立教の山岳部がおどおどしながらナンダ・コットに足をかけるようになったのには、パウワウの「カンチを繞って」が直接の起爆剤であったが、間接的乃至心情的には鹿子木さんの紀行があったことは否めない。後年私が立教山岳部に関係し、ヒマラヤ踏査に助力するようになった機縁は、この前穂高登りにあったと思っ

てはいけ

ところで高村光太郎さんのことだが、一座のひとたちも写真のなかの人物が高村さんであろうとの意見に傾いたし、私も大学時代に再三高村さんのアトリエを訪問したこともあるので、この人物はまさに高村さんだと思ひこんでしまった。話は横道にはいるが、私は

山をきれいに「三」は持ち帰る



大正2年(1913年)8月6日前穂頂上にて／撮影・大木操
後列右より辻莊一氏(神戸二中)、不明、作太郎(案内者)、木内政蔵氏(一高山岳会)、茨木猪之吉氏(画家)、鹿子木眞信氏(教授)
前列右より神田禎次郎氏(神戸二中)、山崎武二氏(神戸二中)、松本唯一氏(一高山岳会)、山口成一氏(一高山岳会)、不明、不明

このすぐれた芸術家とその親友であった詩人尾崎喜八さんのご両所に音楽に関し、また山に関し楯を突いてご不興を蒙ったこともあるが、それについては今は省筆する。

話を本筋に戻すが、山岳会の談話室での歓談のあいだに、大木老台は写真で高村さんだと思われる人物を、そうでないとする材料をお持ちのように伺われた。後日老台は窪田空穂その他の文獻によって、高村さんが神河内に来られたのは大正四年八月七日で、大木さんや私の登った日の翌日のこと、前穂高には登ったのではない確証を得られた。この確証を得る

ために細心の探索をなさったのは敬意を表する。その詳細は一高旅行部先輩の会の雑誌に発表されるところである。

これで私と高村さんとのつながりは切れたのだが、鹿子木さんとの縁は不思議につながった。私たちの一行のひとり神田禎次郎君のご長男が事業の上で鹿子木さんの令息と親しくしておられ、この写真の話しを伝えたところ、大いによろこばれて早速焼増しを大木さんに懇望された。人の世の宿縁は全く不可思議である。思い出したが、私の二男、三男共に鹿子木未亡人にドイツ語を教わったと言う縁もある。考えれば考えるほど人

と人とのつながりは単なる偶然ではなく、そこに何か摂理がはたらいているのしか考えられない。

この貴重な写真のなかにもうひとり忘れてはならない人物がはいっている。それは茨木猪之吉画伯である。日本山岳会が今ほど年をとらないうちの「山岳」や、小島鳥水大先輩の「日本アルプス」を飾った英木画伯の名はわが国の登山史では逸してはならぬものである。私もその作の展覧を見たこともある。このようなすぐれた人たちの間にまじって、若い姿の自分を見るのは、実に感慨無量である。このような写真を大切に保存された大木老台に幾重にも謝意と敬意とを併せ呈したい。なお大木老台は大正初年の神河内の清水屋の写真の原板を所蔵しておられ、私もそれによる印画を頂戴した。三月十一日の山岳会のクラブ・ルーム開設のパーティの席上、大木さんはこの原板を拡大してルームに飾りたいものだとお話してあった。私も是非おねがいしたいと賛同の意を表したが、それと共にその印画が出来たら、この宿に泊ったことのある人がそれに署名する」と面白いでしょと付言した。何分半世紀以前の乾板からの拡大印画は困難であるが、会員のなかには写真技術にすぐれた人もあることゆえ、実現できれば勝手ながら好い思い出のたねになる。

(昭和五十三年三月十二日記)

二十五年前の「本」

—エヴェレスト登頂二十五周年に寄せて—

田中栄蔵

一九五三年五月二十九日金曜日午前十一時半、英国のハント隊はマウント・エヴェレストに初登頂した。今年はその二十五周年に当る。この通知は、六月二日のエリザベス女王の戴冠式の贈物となった。ノイス氏の「サウス・コル」にはコルの南斜面に寝袋をT字型にひろげたところ。勝利の略信である。

隊長ハントは「エヴェレスト登頂」を一カ月で書きあげた。邦訳は望月達夫、田辺主計さんが担当した。本は朝日新聞社大阪本社の図書課で作られた。その直前に原田課長さんは「エヴェレストへの闘い」征頂記録写真集を出した。私はそのお手伝いをした。一般向けの「エヴェレスト登頂」は本文のみで全訳ではない。全訳は特製本だけである。支部の仲間に二十冊ばかりわけていただいた。

このハント隊のニュースは新聞に出た。タイムズ社からは「The First Ascent of Mount Everest, Supplement, 1953 July, p. 32. 1 Shilling」が出ていた。表紙はテンジンを頂上で旗のついたピッケルをかかげたポーズである。撮影者はヒラリー。一九五三年五月二十

九日と記す。裏表紙には「エヴェレスト征服」という本の広告があり、二五シルと予告されている。仏訳本は General Sir John Hunt: Victoire sur l'Everest. Paris: Amiot-Dumont, 1953. p. 383. Traduit par Bernard Pierre, Illu. de René Peron.

この本は訳がよくないと批評があった。ペロンのカラー挿画四一面があり、写真は少ない。やはり絵画の国の本という感じがする。ドイツ版未見。

副隊長エバンスは「エヴェレスト開眼」Eye on Everestを上梓した。ハント本にも挿画を描いたが、これは愛娘サリー嬢のために出した絵物語である(目下紛失中)。

ヒラリーは「わがエヴェレスト」High Adventure、島田巽・松方三郎さんの訳がある。松方さんには「ハント」エヴェレスト目指して「一九五四年の訳もある。ハントにはもう一冊大衆版ともいうべき「Our Everest Adventure, 1964」がある。つまりハントは三つの本を出した。登山・一般・子供向けで普及したことは立派なことである。

寸又川流域の山々

石間 信夫

南アルプスの南部も年ごとにひ
らけ、甲斐駒から一〇日も二週間
もかけて全山縦走してくる登山者
がかなりの数にのぼっている。

しかしこれらの人達は、光岳を
最後に寸又川へ、あるいは茶臼岳
へ戻って煙囪へ降ってしまふのが
大部分で、光岳以南へ足を踏み入
れるのはまことに寥々たるもので
ある。

寸又川をめぐる山々は光岳(二
五九一m)を頂点に、左岸は信濃
俣(二三三二m)、樫沢山(二三
一三三m)、大根沢山(二三三九m)、
大無間山(二三二九m)、小無間山
(二二五〇m)、右岸は加々森山
(二四一九m)、池口岳(二三七
六m)、雞冠山(二二〇四m)、中
ノ尾根山(二二九六m)、黒沢山
(二二三三m)、不動岳(二一七
一m)、鎌崩山(二〇七五m)、丸
盆岳(二〇六六m)、黒法師岳(二
〇六七m)、前黒法師岳(一九四
三三m)、バラ谷山(二〇一〇m)、
そして寸又川の内懐へつき出した
合地山(二一〇四m)である。

樹相について―標高が低いので
中腹から山頂へかけては樅、榎、
岳樺、それ以下はブナ、楓、水槭、
沢グミなどの広葉樹が鬱蒼と茂

り、上流地域一帯は厚生自然保全
地域に指定されている。

お花畑について―乾性のお花畑
は見られないが、加々森山と池口
岳の間に鹿の平、不動岳の西南に
鹿の平、丸盆岳と黒法師岳の間に
丸盆平(仮称)、黒法師岳とバラ
谷山の間に奥西平など、思わぬ草
原がひらけ、美しいお花畑をくり
ひろげている。

樫松について―従前我国の樫松
の南限は光岳とされていたが、信
濃俣の頂上(二三三二m)に数株、
池口岳の西北稜(二二五〇m前後)
に数株生えている。また最近の踏
査によると、丸盆岳西南のガレ場
(二〇〇〇m前後)に、匍匐した
姫小松とは別に、樫松と思われる
ものが数株発見された。現在種子
による鑑定を依頼しているが、も
しこれが樫松としまれば、両者か
らの距離も遠く標高も低いところ
から、まことに貴重な発見となる
であろう。(会員牧野衛氏発見)

登山路について―稜線上は意外
に明瞭な径が通じているかと思ふ
とかすかな踏跡になり、篠笹、灌
木、倒木のボサ漕ぎを強いられる
など、ルートファインディングの
むずかしさは並大抵ではない。
寸又側は千頭営林署、天竜側は

水窪、飯田営林署の林道がかなり
上流まで入っているが、日曜、祝
日には閉鎖されていることが多い
から注意が必要である。

いずれの山へ登るにしても、マ
イカーと林道をフルに利用して二
日ないし三日は見なければならな
い。主稜にも支稜にも水場は全く
ない。

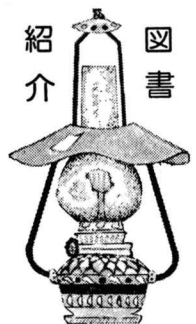
山小屋について―稜線上に山小
屋は全くない、林道沿いの営林小
屋を利用して貰うか、テントを
持参することが必要である。

渓谷について―寸又の真髄は溪
谷にあるのではないかと思われる
が、私はほんの二、三しか入って
いないので何とも云えない。岩魚
釣りはかなり上流まで入っている
模様である。いずれにしても非常
な体力と日数を要せよう。
その他―黒法師岳の頂上には×
印の珍らしい一等三角標石が置か
れている。(会員水野公男氏発見)
バラ谷山はわが国最南の二〇〇
〇m峰である。

下流の下西河内、上西河内には
山蛭が非常に多い。

寸又川の林道は、左岸は柴沢へ
三キロばかり入ったところまで、
右岸は千頭ダムまで、逆河内は地
図の逆という字通りまで通じてい
る。一般車の止めは、右岸は寸
又峽温泉のすぐ上、左岸はその対
岸四キロばかり上流の紅葉台(七
〇〇m)である。

図書紹介



世界山岳地図集成・ヒマラヤ編

会員諏訪多栄蔵、吉永定雄、阿
部和行、薬師義美氏らが中心とな
ってヒマラヤの地図集成を作って
いるという記事を、日経新聞夕刊
で見たのは、昨年十月二十五日
であったが、このほど立派な出来栄
えて誕生したことは、まことに嬉
しいことである。

巻頭にネパール・ヒマラヤの
photo-mapと、その裏面にグレー
ト・ヒマラヤ(三百万分の一)の
折込みがあり、つづいて高山竜三
氏によるヒマラー人と風土と題
したカラー写真十六頁がある。こ
こにはヒマラーの山姿ばかりでな
く動植物、住民と生活、ゴンパ等
等が、かなり広範囲にとりあげら
れていて、それだけでも一つの立
派な作品と思われる。ついで在田
一則氏「ヒマラーの地形と地質」

上田豊氏「ヒマラーの気候と氷河」
高山竜三氏「ヒマラーに生きる人
々」が十二頁に亘って述べられ、
いよいよ本文の地図が始まる。
まずネパール・ヒマラーの二百
五十万分の一の地図につづいて、ヒ
マラーの山々一々の写真が現われ
るが、カラー八頁に亘る山岳写真
は何れも素晴らしく且つ貴重なもの
が多い。

地図の第一はブータン、ついで
シッキム・ヒマラー、カンチエン
ジュンガとその西部、エベレス
ト、クンブ・ヒマール、ロルワー
リン・ヒマール、ランタン・ガネ
ツシュ・ヒマール、マナスル・ヒ
マール、アンナプルナ・ヒマール、
ダウラギリ・ヒマール、カン
ジロバ・ヒマール、アピ・ナンパ
・サイバル、以上十二面見開き大
の地図と、各山群についての登山
史が参考文献を付して添えられて
いる。

次にインディアン・ヒマラーと
して同様な方針のもとに二百五十
万分の一の地図をかかげ、ヒマラ
ヤの山々二のカラー写真が八頁
収められている。同様に見事な作
が多い。

地図はナンダ・デヴィ、カメッ
ト、ガンゴトリ、レオ・パルギャ
ル、クル、中央ラホール、メント
サ、キシットワール、ヌン・ク
ン、レー、スリナガール等十一面
見開き大の地図と、登山史が添え
られている点は前と同じである。

最後にトレンキングについても三十余頁があてられ、探検・登山史年表(一六二四—一九七六年)、地図地名索引三頁が添付されているが、前記の各山群の登山史には本書の多くの部分があてられ、全体で三三〇頁となっている。

本書は、現在までの日本人によるヒマラヤ登山及び研究の、ある意味では精華を示していると言っても過言でない労作であり、編纂の中心になったと想像する諏訪多氏らをはじめ、多くの執筆者、地図作成者、写真撮影者、同提供者の協力で賛辞を呈したい。そして

本書が、今後日本におけるヒマラヤ登山者、研究者の座右におくべき一書として、欠くことのできぬものであることを喜びたい。

最後に私なりの感想を少し述べてみる。出来栄えは既述の通りまことに見事であるが、地図集成と銘うったからには、もう少し地図の部分が多いことは、実は期待していた。いわゆるスケッチ・マップ式のものでも、信用できるものは、とり入れた方がよくはなかったか。更には、日本山岳会マナスル隊作製のマナスル東面地図とか慶応隊によるヒマルチュリの地図のように、実測図のあることも知られているし、少し古いものではカール・ウィーン作製のゼム地域の地図とか、最近ではE・シユナイダーによるエベレスト周辺の精細な地図(二万五千分の一)など

がある。これらについて編纂者らは、ご存知でない筈はない。ただ著作権、版權等の問題で簡単にとり入れられなかったことと思う。もしそれならば、そうした地図の所在を文献上に明示できなかったものか。登山史の記述をもっと省略して、例えばエベレストなら現在——の地図が最良、それは——を見よ、といったような記述が望ましかった。

各山群の登山史にはかなり詳細な参考文献が添えられているが、むしろ地図の作製史といった観



から書いてほしかったと思う。この編纂者たちならそれが十分出来たかと思うだけに、いささか惜しまれる。またヒマラヤの地図の作製史の領域まで入りこむのは、少しおごちになるとしても、ヒマラヤ全域の地図が印度測量局の地図なくしては考えられぬとき、その基本的文献である R.H. Phillimore: The Historical Records of the Survey of India, 5 vols. は何をおいても挙げておくべき文献ではなかったかと思う。

叙述が、やや見られるのは葉師氏の「カンチとその西方山城」、同「アンナプルナ山群」、阿部氏の「ランタン」、吉永氏の「カンジロバ」等である。

なお地図上の山名、地名等はいちいち詳細に検討する時間的余裕はなかったが、本文中には少々誤植があり、二一九—二二一頁にそれがやや目立ち、また二二六頁(右)の参考文献として挙げたHJの巻数に間違いがあるのは、この種のものとしては全体を精査して是非正誤表を作られることを望む。

本書は監修者として吉沢一郎氏の名が見られるが、編纂者の明記がない。執筆者全員というわけではあるまいから想像する以外にないが、これだけの本なのだから明記すべきであった。

またヒマラヤ篇であるのにナンガ・バルバートが含まれていない。これは或いは次に計画中のカラコルム、ヒンズー・クシユの方へ含めるお考えかと推測するが、それなら、その点も明記すべきであったと思う。なおアッサム・ヒマラヤのナムチャ・バルフ周辺は明瞭なものが入れにくかったと思うが、スケッチ・マップ程度でも収められていたら、よかったと考える。(望月達夫)

サイズ375mm×260mm 三三〇頁
昭和五十二年十二月 学習研究社刊 定価一九〇〇円

イタリアへの郷愁

牧野 文子著
牧野四子吉絵



手代木天

山岳会でイタリアやと云えば牧野さん、また牧野さんと云えばイタリア。フォスコ・マラーニさんの本の訳者としても著名な詩人・牧野文子さんと画家・四子吉さん御夫妻による三度目のイタリア紀行である。前二回の旅もそれぞれ『イタリアは青い空』、『知らなかつた美しいイタリア』と本にされた美しいイタリアと本にされ、『今度のこれに加えてイタリア紀行の三部作にしたい』と著者も述べておられる通り、三回の旅でイタリアのほぼ全土を歩き、三部作でイタリア全体を書かれたことになる。

今度の旅でも、「ふたり旅ノオト」と可愛らしくほほえましいサブタイトルがこの本に付けられているように、まるで若者のような

好奇心を持ってイタリア半島の南から北までを、ある時は親友のマラーニさんの運転する車で、またある時は列車に乗ってかけめぐり、その行く先々で、旧知の人々や新しく出会った人々との心暖まる交友が展開される。まるで若者と失礼なことを書いてしまったが、イタリアへの深い愛情、そして美術への造詣の深さは、もちろんヤングカップルの及ぶべくもない。

旅の庄巻は何と云っても著者の云う「旅の中の旅」、めずらしいプリーヤ地方への旅ではなからうか。山好きの読者は、後半のドロミテ山系のセルヴァ日記にひそかな期待を持ちつつ読み始めることだろうが、前半の大部分を当てられたプリーヤ地方の旅にすっかり引き込まれてしまいうちにちがいない。

巻末には前二冊同様、小宮山量平氏の愛情のこもった賛辞がある。少し残念に思ったのは、やはり地図が全く無いことで少々不便を感じたことぐらいか。発行されてからやや遅れすぎて間のびのした紹介となったが、ルームに寄贈していただいたのを機会に一筆した次第。

一九七六年十月 理論社発行
三八一ページ、定価一五〇〇円

*

*

新ルーム披露パーティ

— 3月11日 —



＜写真＞右から堀田弥一、小原勝郎、吉沢一郎、ローク・ダルシャン、三田幸夫、西堀栄三郎、田口二郎、浜野正男のこ機嫌の諸氏。(写真／上飯屋正和)

日本山岳会は、会員各位の絶大なご支援により、東京麹町の一角に自前の新ルームを持つことができました。各室の造作、飾りつけなど、まだ不十分なところがありますが、その新ルームの会員各位

ルーム基金応募者

ご芳名(9)

(昭和53年3月10日現在)

敬称略・順不同

〔東京の部〕一口一万円 数字は口数
(2) 池田智津子、宇田川芳伸、和田晴光、長谷川良典、丹部節雄(1)
篠田勝久、川崎精雄(追加)

小計 六名
金 一一〇、〇〇〇円

累計 五九〇名 一一三九・九口
金 一一、三九九・〇〇〇円

〔地方の部〕一口五千円 数字は口数

(10) 原真(4) 津田周二、兵庫県山岳連盟(追加)(2) 田中栄蔵、佐々木四士臣(1) 長島隆、上杉嘉孝、清水利夫、橋本正人、伊藤行人、稲田定重、松本亨

小計 二名 二九口
金 一四五、〇〇〇円
累計 五〇四名 一一四三・九口

七十三年度報告される予定です。ハ山岳会ルーム新築披露パーティ出席者(順不同、敬称略) 望月達夫 山崎安治 近藤信行 山本健一郎 佐々保雄 神原忠夫 平沢亀一郎 浜田一馬 今井友之

へのおひろめパーティが3月11日(土)午後2時から約3時間、にぎやかに開催されました。西堀会長の挨拶で幕を開けたのは、長老会員、地方会員などを集めた熱気でむせかえるよう。清野恒画伯の記念絵はがきに、新たに描彩をしてもう長い列がつづき、たのしい午後をすごしました。なお、ルーム移転の経緯等の詳細は「山岳

助 広島三朗 宇津力雄 佐藤裕宅間清子 村井米子 伏見紀子 矢田城太郎 根本知子 岩瀬浩河野幾雄 菅野弘章 島田巽 今井喜美子 小方全弘 浜野正男 川崎精雄 浅原重継 門井照子 小倉厚 成瀬岩雄 鶴岡元之助 榎本進 高田光政 田中壮吉 田由紀子 横田春雄 谷口現吉 高沢英夫 寺村栄一 沼倉寛二郎 内ヶ嶋吉広 早川種三 平柳一郎 柴田巖太郎 岩崎三郎 梨羽時春 清野恒 西郷正郎 堀江節子 菅見愛子 吉武正子 田口二郎 細川沙多子 春日直道 沢村幸蔵 見沢繁幸 川越孝次 伊丹一男 田尾正 杉山孝 徳久球雄 牧野衛 青木昇 高橋定昌 名須川浩和 田誠一 星野重 河村栄二 北島光子 大森久雄 広羽清 西堀栄三郎 折井健一 松本熊次郎 鈴木英一 小林重一 松本慎太郎 平岡誠一郎 山口一孝 辻莊一

金 五、七一九・五〇〇円

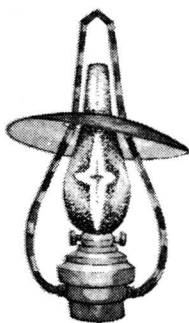
大累計 一七、一一八・五〇〇円

申込人員 東京 五九〇名

地方 五〇四名

(既報分訂正 三八八号所載中村賢二氏地方二口を東京一口と訂正。三九〇号所載高橋千鶴子氏東京二口申込は取消し。累計は訂正済み(法人協力先の募金)

昭和53年3月10日現在で八、〇七〇、〇〇〇円入金済み。



加納巖 近藤緑 関口周也 久保孝一郎 武田満子 小林猛臣 小倉茂輝 小倉董子 加治甚吾 坂本幹 大沢篤 中保 坂倉登喜子 滝川清 宮下秀樹 岡茂雄 山本朋三郎 小原和晴 吉田宏 高遠宏 高田健夫 黒石恒 丹部節雄 北博正 中西章 板倉勝正 渡辺嘉男 雁部貞夫 鈴木耕治 山崎金次郎 小野利次 早川義郎 吉田礼二 橋本清 藤井運平 小原勝郎 黒沢通子 春田俊郎 大野俊夫 吉谷聖司 森川洋佑 大塚博美 中屋健一 見学玄 河西弥

中野征紀氏

二月二十五日午後八時四十五分、膀胱癌のため銘路市立総合病院で逝去。享年七十三歳。本州製紙銘路病院院長。医学博士。北大山岳部先輩、昭和初期日高山脈及び中央高地に多くの足跡を残す。当時の「北大山岳部々報」及び「日高山脈」に詳しい。一九五七～八年度第一次南極越冬隊には副隊長兼医師として西堀隊長の片腕となり、一九六二年北大チャムラン登山隊々長として登頂に成功した。著書に「南極越冬日記」がある。

一九三一年(昭和六)四月本会入会、会員番号一三〇一、紹介者は伊藤秀五郎、松方三郎、鳥山悌成氏。数年前評議員・北海道支部長をつとめ、また年次晩餐会などへ銘路から出席したこともある。葬儀は二十七日銘路市開名寺で行われたが、本会は弔電を發し生花を供えた。謹んで哀悼の意を表する。

(望月達夫)

一 渡辺公平 石原憲治 内田耕作 田辺主計 斎藤敏男 高見沢領 飯野亨 長尾悌夫 名兒耶達男 平山武志 川森左智子 川井耿子 神崎忠男 榎有恒 武藤晃 織内信彦 ローク・ダルシャン 堀田弥一 横山厚夫 上野英世 大木操 二本信次 山村正光 石垣政雄 大山光一 吉沢一郎 土井高夫 三田幸夫 野口未延 越田和男 片岡博 中川恵資 石川治郎 菊地文雄 三渡忠臣 和久井正明 長沢光和 新堀春喜 山本久子 中村小一郎 船越好文 加藤泰平 入沢郁夫 松沢潤吉

53年度総会

5月12日

日本山岳会昭和53年度通常総会は5月12日(金)、東京市ヶ谷私学会館でおこなわれます。詳細は別途お知らせします。

上高地山研日より

ゴールデンウィークにオープン!

雪と氷にとざされていた上高地にも、春が足早にやってきました。会員の皆さまから、かねてからご要望がありました連休オープンが、やっと実現、ゴールデンウィークの初日、四月二十九日(土)に開所いたします。

ただし、積雪の状態によっては、何かとご不自由をおかけするかもしれませんが、宿泊だけはできるよう準備いたしますので、ご了承ください。

事務局へお早目にお申し込みください。(二十九日以降は、山研へ直接お問い合わせください) 会員皆さまの山研です。自然と人との出会いの場として、ぜひお誘い合せの上、ご利用ください。

(山研運営委員会 小倉)

山菜の夕べ

山菜山行の前に、片岡博氏を講師としてお招きして勉強会を開催します。5月下旬の松枝岐付近の山菜について、スライドをまじえての楽しいお話をさせていただきます。

日時 5月22日(月) 18時30分～20時30分

場所 日本山岳会ルーム

会津駒ガ岳山菜山行

南会津の松枝岐に泊り、山菜を味わい、残雪の会津駒に登ります。松枝岐では、27日に会津駒往復、スキー(帰りにする)、山菜とりの三つのグループに分れて行動する予定です。当夜懇親会を開きます。旅館の白木屋は、秘伝手打そばをはじめ食べきれないほどの山菜料理が出される予定です。

日時 5月27日(土)～28日

場所 松枝岐村白木屋(午前9時現地集合) 電話〇二四一七五

会費 六〇〇〇円(小学生三五〇〇円) 交通費別一泊二食

解散 28日現地解散
なお現地までの往復バスを用意します。ご利用ください。バス

お知らせ

代往復七〇〇〇円(小学生三五〇〇円)。5月26日21時30分新宿西口スバルビル前に集合(22時出発)

申込み 現地参加か、バス利用か、27日の希望グループ、住所、氏名、年齢、連絡電話、性別を記入のうえ日本山岳会事務局まで。バス利用の方は5月20日までにお申込みください。(集委員会)

第十六回木暮理太郎翁

碑前懇親会へのお誘い

今年も例年通り、木暮先生をしのんで次のように懇親会を開催いたします。特に本年は、木暮碑建立に心血をそそいだ、前山梨支部長、故三井松男氏の七回忌にもあたります。是非とも、会員諸氏が多数参加されますようお誘い申し上げます。

日時 5月20日(土)～21日

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平

費用 五〇〇〇円(宿泊、記念品を含む)

申込 JACルーム

締切 5月10日
中央線荏碓驛下車。ラジウム温泉行バス終点より、徒歩一時間半。タクシーその他の便あり。

(山村正光)

日本山岳会

図書室利用規定

することができ。

新ルームへの移転により図書室の整備・充実をはかっておりますが、このほど次のような図書室利用規定(暫定)を定めました。貴重な図書紛失、汚損等を防ぎ、会員各位に充分ご利用いただけるよう、みなさまのご協力をお願いいたします。

(図書委員会)

社団法人日本山岳会図書室
暫定利用規程

(趣旨)

1 この規程は、社団法人日本山岳会図書室の利用について定めるものとする。

(適用範囲)

2 本会に所属する図書、雑誌、記録類等の資料(以下「図書」という)の利用は、別に定めるもののほか、すべてこの規程の定めるところにしなければならない。

3 本会の図書室を利用できる者は、原則として本会の会員に限る。ただし、会員の紹介状を持参した場合は、会員以外の者についても利用を許可



(利用時間)

4 図書室を利用できる時間は、火曜日から土曜日までの午後1時30分から午後8時までとする(祝祭日及び年末年始の期間を除く)。

(利用手続き)

5 図書室を利用するときは、図書担当職員に会員証を提出し、備付の閲覧者名簿に所定の事項を記載して、図書室の鍵を受取るものとする。

6 本会に所属する者は、本会図書委員会が団体会員に対して発行する利用証を会員証の代りに提出するものとする。また会員以外の者は、会員の紹介状と本人の身分証明書等を提出し、許可を受けなければならない。

7 図書室の利用は、図書室での閲覧及び文献複写に限り、貸出は原則として行わない。

(利用方法)

8 図書の利用方法は、次のとおりとする。

(1) 書庫内の書架に配架されている一般図書及び記録類

報 告

海の男山で鍛える

―梓会五十二年年度报告―

「海軍経理学校の生徒は旺盛な愛国心を持っているが、その国たるや抽象的で国土を知らない。国土を知るには山に登るに如かず」。

この田部重治教授の一言で大正五年山岳部梓会が生れた。戦後GHQの指令で梓会は解散したが、後復活し、昨年はその十五周年に当るので記念行事として上高地ハイキングを実施した。計画は渡辺貢、佐藤宗・両幹事が担当した。

八月六日(土) 早朝上高地に着いた一行八十名(最年少は小学二年生、最年長は田部教授の令弟十八歳の脇坂雄治愛知大学名誉教授)は西糸屋前の梓川畔で朝食の後、次の四班に分かれて所謂スクランブルハイキングに出発した。出発に際し、山を汚さぬこと、天候急変のときは引き返すことを新井克巳会長より要望した。

一、西穂高独標班 小中学生三名を含む三十五名は山田隆一防大ワンダーフォーゲル部コーチをリーダーとして三パーティーを編成し、十時間で独標を往復した。松本深志高校生の落雷遭難に鑑み慎重に行動したが快晴で事なきを得

た。大部分の者は三千メートル近い山は初めての事として一生忘れえぬ思い出となったようである。

二、徳本峠班 小中学生三名を含む二十名は日野虎雄副会長をリーダーとして二パーティーに分かれ徳本峠を往復した。この道は大正二年八月清水屋にウェストン夫妻と共に滞在していた高村光太郎がミス智恵子を齎留小屋まで迎えに登った道であり、筆者が大正十一年八月初めて島々より上高地へ入った道である。一行は峠の頂上で穂高を仰いだ感激を生涯持ち続けることであろう。筆者はかつて松方三郎日本山岳会長に、徳本峠上の展望は比類なきものではないだろうか、と聞いた時の返事は「まさに日本一」であった。

三、徳沢班 女性を主とした十五名が、長谷川太郎防大名譽教授(元ワンダーフォーゲル部長)をリーダーとして新村橋を往復した。食べられる野草や高山の花を研究しつつ高原の散歩を満喫した。

四、明神池班 保利重三ドクターと脚弱組ら十名で筆者が案内役となり、明神池で海の神様である穂高神社のお祭用の赤い舟を写し、嘉門次小屋で嘉門次顔のキートンホルダーを見付たり、七、八年前まであった池を西に渡る小橋が壊れて池の下流に新しい橋が

出来ているのを初めて知ったり、晩年の田部先生がさぞ喜ばれたであらうと思われるのんびりしたそぞろ歩きを楽んだ。

西糸屋に泊った翌日、田代池、大正池、ウェストン碑への散歩の後、安曇節や「穂高よさらば又来る日まで」を歌いつつ松本に向ったが、中には徳本峠を越えて島々へ出た元氣者が十人程いた。先年の焼の爆発で大正池や田代池が荒れていて残念に思ったが、記念山行としては、海の男山で鍛える、まことに意義深い山旅であった。その他の52年度のハイキングは次の通り。

○曾我梅林(2月20日) 曾我兄弟の史蹟探訪と満開の梅鑑賞、三十五名。

○伊豆ヶ岳(11月6日) 鎖場訓練と旧正丸峠道探訪、四十名。

なお筆者は九月西郷南洲百年記念式典に参列の帰途、霧島連峰を五千穂峯、新燃岳、韓国岳へ縦走し、えびの高原へ出た。黄昏の大浪池は五十年と同様物凄さがあつた。えびの高原の名は一面の薄の穂の色がえび色だからとの事であるが、久住山でもやはりえび色であつた。

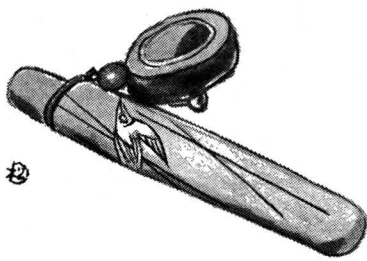
注、上高地ハイキングの記録は略式印刷し関係の向へ配呈した。

(茶谷東海)

ならびに図書室内の新刊の雑誌は直接検索するか、または目録によって検索し、図書室で利用するものとする。

(2) 図書は、文献複写を必要とする場合のほか、無断で図書室外に持出してはならない。

(3) 利用済みの図書は、必ず所定の位置に戻さなければならない。



(貴重図書の利用)

8 貴重図書及び準貴重図書(図書室内の書棚に配架されているもの)を利用したいときは、所定の閲覧票に必要事項を記載して、図書担当職員に申出るものとする(貴重図書及び準貴重図書棚の鍵は、図書委員及び図書担当職員以外、取扱うことはできない)。利用済みの貴重図書及び準貴重

重図書は、図書担当職員に返納するものとする。
(利用後の手続き)

9 図書室の利用が終了したときは、図書担当職員に報告して図書室の鍵を返納の上、会員証(団体会員に所属する者は利用証、非会員は身分証明書等)を受取るものとする。

(文献複写)

10 文献複写を希望するとき、図書委員または図書担当職員に申出て許可を受けなければならない。

複写は、原則として複写を希望する者が、本会内で自ら写真撮影または電子複写機によって実施するものとする。電子複写機を使用するとき、所定の申込書に記載し、別に定める料金を納入しなければならない。

(弁償責任)

11 利用中の図書を汚損または損傷したときは、図書委員会が別に定める方法によって弁償しなければならない。

(規程の改廃)

12 この規定の改正または廃止は図書委員会の議を経て理事会に諮り決定するものとする。

(付 則)

1 この規定は、昭和53年3月14日から施行する。

八子ヶ峰と竹寺

三水区・二つの現地集會

三水区は昨年の11月19日、エーデルワイス・クラブと合同で八子ヶ峰へ、今年の2月19日に竹寺と年末年始の二つの現地集會を実行した。

◇八子ヶ峰 シーズン外れの静かな北八ヶ岳で初冬の中部山岳の山脈を眺め、酒を楽しむ会心の忘年山行となった。

八子ヶ峰は蓼科山の西に連なる一八〇〇メートル前後の高原。その一角にあるヒュッテ・アルビレオが集會の宿である。アルビレオとは白鳥座のβ星の名、青と橙に輝く全天最美の二重星。夏の宵、小屋の正面に輝くという。シーズンのさかり、ヒュッテ前の道は登山者が行列のように歩いている、というが、初冬のいまは通る人もなく、山は静かに暮れてゆく。富士山は雲にかくれ、甲斐駒と仙丈岳の間に、ひととき高く首をかしげたような北岳が印象的だ。

宴に集う人はエーデルワイス・クラブの坂倉会長、今井喜美子顧問ら女性十名、広羽、高田両先輩と関塚、若い小屋主の梶さん、その人柄にひかれてたびたび訪ずれるという東京の青年4人、合計18人の大集會となる。大いに歌い、飲み、語り、宴は12時を過ぎても終らなかった。夜半空は暗く曇り

諏訪の灯が白く冷く光っているのを見る。

翌朝も一面の雲、目の前の蓼科山も中腹以上が隠れている。山腹の樹林帯が霧氷におおわれ、夢幻をみるように美しい。戦争中に八ヶ岳山麓にご夫妻で疎開しておられた今井さんは付近の気象に詳しい。「この雲はすぐ晴れます」と有難い予報。

帰路は二手にわかれ、坂倉さん今井さんら女性6人は旧道を親湯に下る計画、女性4人は霧ヶ峰か



ら八島湿原へ行く。男3人はついて行くことになった。男女7人は霜柱を踏んで9時半に出発。白樺湖が木の間越しに光って見えるころには、今井さんの予報どおり稀にみる快晴となった。

八島湿原から強清水までは木立のなかの苔の道、明るい熊笹の道、枯草の道と変化に富んでいる。人影のない道を黙々と歩く。静かだ。霧ヶ峰からの三六〇度の展望が圧巻だった。

◇竹寺から名栗へ 2月の竹寺集會は昨年に続くもので、三水区の

恒例行事となりそうだ。参加者は8名。西武池袋線の飯能から車2台に分乗して杉林のなかの道を竹寺へ。正式の名称は天王山八王寺という。珍しく神仏混合の信仰を残し、赤い鳥居をくぐる。竹林が美事である。

日は傾いてきたが海拔五〇〇メートルという鐘撞堂へのぼる。名栗川奥の残雪豊かな連山にみとれる。空気が澄んで、木の間越しに新宿副都心の高層ビルがはるかにみえる。

竹寺は竹の器に盛った精進料理で有名になった。奥武蔵の主(女神?)坂倉さんが昔から大野住職と親しい関係で、竹寺の集會が実現した。料理はすべて生地を生かした竹の器に盛ってある。輪切竹の猪口、蓋物、箕の形など、付け合せも見事な工夫は懐石料理を築しむのに似ている。松の実、もみじ、いたどり、柿の葉、たんぼ、すい葉の天ぷら、いちじくの甘露、甘梅のしそ巻き、露のとうなど。岩茸のゴマ和えが珍味だった。銀杏入りのおにぎりの美味しかったこと。

薬湯も長い竹筒に入って運ばれてくる。竹の徳利はポコポコとい音がするので、大いにメートルがあがるが、次々に魔法のように竹筒が運ばれてくる。さすがの山酔いの強者も「もう十分」と、別間に席を移す。酒の飲めない甘党にも片岡さん持参のボルドーの

売場ご案内

最新入荷及好評の本・報告書

- ★一日二日山の旅・静かなる山の旅(河田楨) 揃定価3,200円分売不可★希望のアルビニズム(ヤニック・セニユール/近藤等訳) 1,300円
- ★山 探検 フィールドワーク(松本健夫) 950円
- ★東京の山(読売新聞八王子支局) 1,500円
- ★北海道の自然⑦流水(北海道新聞社) 980円
- ★冬夜雪明ーもんたにゅ25号 400円(別冊付)
- ★国策えて山河ほろふ(荒垣秀雄) 980円
- ★花の文化史(松田修) 980円★あをいー報告第35号1977ー(水戸葵山岳会) 500円
- ★ハツラI(東京都山岳部カラコルム登山隊) 3,000円★年報第6号ー特集・大学山岳部の原点を探るー(日本山岳会学生部) 3,600円

茗溪堂

＜山の本の売場＞お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

銘醸もの、縁の下で冷したワインの美味に感激する。

坂倉さんは西武線が武蔵野鉄道と呼ばれた昭和初期の奥武蔵を語ってくれる。長い付き合いのメンバーも初めて聞く話が多い。鉄道は農業用に利用されたところで、道や路跡を求め、みちしるべの石を探し、指導標をたてて歩いた青春の思い出。近代化の波が日本中に押しよせているいまも、奥武蔵には昔の面影が残っている、という言葉をとくに感銘深く聞いた。

翌朝も快晴。木の間洩る日ざしも春が近いことを感じさせる。松、杉の林の下、班雪の残る道が美しい。豆口峠を越えて名栗へ。途中のせせらぎに凍りついている

透明の玉水を失敬する。自然破壊?。酒のオン・ザ・ロックで昼飯兼第二次集會を開こうというわけ。廃屋のある日だまりで昼食にする。鍊のなれ寿司など珍味のかずかずを肴に、夢のような大きく楽しい会話にはなが咲く。みな若者のようだった。

(参加者) 沼倉寛二郎、坂倉登喜子、片岡博、斎藤健治、高田貞哉、進藤波男、勝田房治、関塚貞亨(関塚貞亨)

秋山二十六夜山

現地小集會

この山の名をきいてどこにあるか即答出来る人はまずいまい。五

万分図幅上野原、秋山川上流の原、浜沢集落の南にある九七一・八メートルの三角点がそれ。よくもまあ見つけ出したものよと、あきれながら中央線上野原駅前から集会委員諸氏のクルマに分乗。尾崎から登り約1時間半。道志の山

ヒマラヤン・クラブの集会

ヒマラヤン・クラブ創立五十年を記念する会合が去る2月中旬、インド、ニューデリーで開かれた。日本からは、西堀栄三郎本会会長が出席、各国からの岳人と交歓、一九二四年イギリス隊の映画(「山」前号参照)を披露して好評だった由。この会の詳細は「山岳」七十三年に紹介の予定。

栗飯原さんへ ノルウェーの勲章

永年会員栗飯原健三氏(会員番号七九二・八〇歳・西宮市在住)に於ける2月11日神戸を訪問されたノルウェーのハラルド皇太子殿下から、文化交流の貢献者だけに贈られる「セント・オラフ勲章」が直々に手渡された。栗飯原氏は半世紀以上にわたってノルウェーの多数のペンフレンドと文通、日本とノルウェー両国民の心のつなが

を眺めるだれもない山頂は、まさに「晩秋の日当りのいい枯草の斜面、空想を拾う場所」(大島亮吉)そのもの。そこで昼食、昼寝、痛飲、放歌高吟。中川武集会担当理事の芸達者ぶりに一同笑いこころげながら帰路は道のない小沢

り、親善交流のパイプ役となってきたというのが、その理由。その因になるのが大正12年9月号「山とスキー」誌の加納一郎氏の「園谷」の記事、山とスキーのノルウェー語文庫を学習したのがキッカケであったという。日本山岳会々員となったことが遠因で、日本山岳会には感



謝いたしますと同氏は言われました。以上は神戸新聞2月23日夕刊に掲げられたものだが、早速報告された津田周二氏に対し感謝する。(望)

東海支部通常総会

日本山岳会東海支部通常総会は、4月22日(土)17時30分から、名古屋市中区橋一―二七―

を落葉のなだれとともに下る。昨年11月12日、のどかな薄曇の日曜日。参加者▽松丸秀夫、清水晴美、佐藤裕、渡辺、中川武、上原屋正和、藤本敏行、大森久雄、加藤隆、中川氏子女ほか。

八、尾上機械講堂でおこなわれます。

川喜田二郎氏に 秩父宮記念学術賞

川喜田二郎氏は先ごろ、第14回秩父宮記念学術賞を受賞されました。日本山岳会から推薦した同氏の『ネパール山地における民族地理学的研究』が賞の対象となったものです。授賞式は3月20日、東京の銀行倶楽部でおこなわれました。お祝い申し上げます。

アフガニスタンから

アフガニスタンのカブル大学に留学中の会員、泉久恵さんが、2月中旬一時帰国、図書委員会との会合に姿をみせました。現地言葉(ペルシア語)もすっかり上達したようすで、昨年夏にはバダクシヤを訪れたそうです。同月下旬、新潟からハバロフスク経由タシケントまで戻りまたアフガニスタンへ元氣に戻ってゆかれました。

八方尾根スキー懇談会

恒例のスキー集会は、1月14日から16日まで、八方尾根の中山大荘で行なわれた。

暖冬がかりだった雪もその直前に気圧配置が冬型に戻って十分に降り、快適なコンディションでスキーを堪能できました。集会委員のきめ細かなご配慮で、まことに楽しいヒュッテンレーベンを味わせていただきました。

1月13日深夜、新宿駅西口に集合し、渡辺兵力さんや松丸さんと再会を喜び合っているうちに、高所ヤッケにジーン姿の精悍な山男、華やかなスキーウェアのお嬢さん達が、続々と集まってきた。

神崎、中川両兄のお見送りのなか用意されたバスに乗り込み、零時すぎ白馬に向かい出発した。

バスは、我々の楽しい話らいと夢を乗せて、国道20号線を快調に走ったが、塩尻から安曇野に入ると大変な渋滞となってしまう、現地への到着が半日あまり遅れ14日の昼になってしまった。

しかし、曇り空がスカッと晴れ上り、五竜・唐松・白馬三山の全容が我々を迎えてくれた。

昼食をたべるのもどかしく、一行は黒菱の中山大荘へ向ったが、私と他三名は、かねてより療養中の郷津長平氏を見舞うために

この日は新田に泊り、翌日集会に合流することにした。

15日午前中は国境稜線に厚い雲がまつわっているが頭上は快晴、OVER SIXTYの方々が率先、若者は引きずられるようにして第3ケルンまで登る。午後より途中参加組をも含めて、老若男女が班別に分け、童心に帰っての雪中運動会を楽しんだ。その後思い思いに山麓まで滑りおりたが、十数名が時間切れでロープウェイ終点から上のリフト運行に間に合わず、闇の中を歩いて登り、帰りつくというハプニング。

18時頃より恒例の懇親会が開かれ、集会委員諸兄弟、心づくしの美酒、好菜に満腹のお腹も、班別

祝 新ルーム

春山です スキーに登山に
お待ちしております (4月25日より)

会員の方には特別サービスさせていただきますので、その旨フロントにお申し出下さい。

雷鳥沢温泉 ロッジ立山連峰

支配人・坂本 幹 (会員・元愛知県岳連理事長)

図書受入報告 (昭和52年7月～53年2月)

図書委員会

著者、訳者または編者寄贈

- (1) 日本山岳会ナンダ・デヴィ委員会
編「ナンダ・デヴィ縦走・1976」
茗溪堂 昭52
- (2) J. ハント著 望月達夫・田辺主
計訳「エベレスト登頂」河出書房
新社 昭52
- (3) 阿部恒夫著「あるむ雑記」もんた
にゅ会 昭52
- (4) 藤木高嶺著「極限の山・幻の民」
立風書房 昭52
- (5) 牧野文子著 牧野四子吉絵「イタ
リヤへの郷愁」理論社 昭51
- (6) 重村伝平著「神風旅行記」重村
伝平 昭52
- (7) 日本ヒマラヤ協会編「中央アジア
・シルクロード」日本ヒマラヤ
協会 昭52
- (8) 宮下啓三著「スイス・アルプス風
土記」白水社 昭52
- (9) 雪標山岳会編「MAKALU-II」
雪標山岳会 昭52
- (10) オギノ芳信著「上州路双体道祖神
の旅」煥乎堂 昭52
- (11) 広瀬政美著 歌集「山行」白玉
書房 昭52
- (12) 千葉大学ヒマラヤ委員会・千葉大
学東ネパール学術調査登山隊編
「東ネパール登山と調査報告書」
千葉大学ヒマラヤ委員会 昭50
- (13) 東京農業大学山岳部編「報告・第
3号」東京農大山岳部 昭52
- (14) 山岳巡礼倶楽部編・上村新二郎氏
遭難追悼誌「どんぶりばちの唄」
山岳巡礼倶楽部 昭52
- (15) 福岡まいづる山岳会編 まいづる
草 No. 265「鹿島槍ヶ岳東尾根に
おける遭難報告特集号」福岡ま
いづる山岳会 昭52
- (16) 神戸市立御影工業高校編「松川水
害遭難事故調査報告書」昭52
- (17) 近藤信行著「小島島水・山の風流
使者伝」創文社 昭53

出版社寄贈

- (1) 原真・田村俊介編「中央アジアの
高峰」ベースボールマガジン社
昭52
- (2) 原真著「乾いた山」山と溪谷社
昭52
- (3) ロイヤル・ロビンズ著 新島義昭
訳「クリーン・クライミング入門」
森林書房 昭52
- (4) 奥村清明著「秋田の山」無明舎
昭52
- (5) 織内信彦著「快晴の山」茗溪堂
昭52
- (6) エドモンド・ヒラリー著 吉沢一
郎訳「ヒラリー自伝」草思社
昭52
- (7) 今関六也・水野伴彦著 野外ヘン
ドブック3「きのこ」山と溪谷
社 昭52

(以下次号)

アトラクションの名(迷)演技に
笑いこらげてこなれてしまい、ま
た、食べなおすありさま。
山の歌や楽しいゲームに夜のふ
けるのも忘れてすごしたが、暖か
な山荘の外では、いつのまにか激
しい吹雪にかわっていた。
翌16日、吹雪の中をリゼン、
パノラマ等のコースに分れ、集会
最後のスキーを楽しみつつ全員無
事下山し帰路についた。バスは、
国道の渋滞を巧みに避け、22時

頃、無事新宿に着き、解散した。
私は、六十五歳の今年も、恒例
のスキー懇親会に参加できたこと
が本当に嬉しく、いつまでも続け
られることを願っている。
最後に、集会委員、中大OB諸
兄の御尽力に心から感謝し、ま
た、山岳会にこのような楽しい集
会がより一層多く持たれることを
望んで筆をおくことにする。
(山口一孝)

△参加者▽藤井運平、松丸秀夫、
渡辺兵力、宮下秀樹、大森久雄、
山本良三、山口一孝、小松原一
郎、久保孝一郎、沢井政信、吉田
実、入沢郁夫、町俊一、高橋聡、
市村洋子、亀田伸子、帰山毅ほか
非会員18名(宮下夫人、同長女・
次女、高橋長男、帰山夫人、桐生
夫人等を含む)。他に集会委員6
名(河村憲二、岩本和夫、藤本敏
行、桐生恒治、中沢光江、上飯居
正和)

会務報告

2月理事会議事録

(2月13日午後6時半)

本会ルーム

▽出席者 望月、折井各副会長、
宮下、高遠、山本、小倉、中川、
橋本、大森(欠)、鈴木、大森
(欠)、黒石、越田、田村、嵯峨
野、浅田各理事、村山監事、浜
野、山崎、金坂、松丸、近藤、
小原各評議員
委任 西堀会長



▽議案

・慈恵医大創立百年記念学術遠征
隊一九八〇年推薦状交付願
(大森薫)

承認

・北大山岳部より、山岳46・47年
号中の北大の記事を「北大山岳
部50周年記念誌」に転載許可願
(宮下)

承認

・3月11日の新ルーム披露パテー
ィ担当について(中川・黒石)
集会委員会、婦人懇談会で担当、
時間は午後2時より

了承

(越田)

・ベースボールマガジン社発行の
「登山」改訂について(金坂)

了承

▽報告事項

・ルーム移転完了 (高遠)
・カラコルム学術遠征隊(ラトッ
ク3峰登山)は青年懇談会と合
同で計画 (浅田)

・新ルーム購入資金、総額七千万
円のうち四千五百万円中央信託
銀行より借入れ(10年間のロー
ン)、他は会の資金およびルー
ム募金で充当 (山本)

・青年懇談会 (浅田)
3月4日 猪肉を喰べる会

・集会委員会 (中川)
八方スキーには40名参加

2月18日 K2登頂報告会
3月25日 オリエンテーション
指導委員会 (嵯峨野)

2月16日～19日 山スキー講習
会

・図書委員会 (越田)
3月16日 山岳史懇談会

・山研委員会 (小倉)
昨年度より若干収入増

ルーム日誌

(52年12月)

10日(土) 指導委員会
12日(月) 理事会
14日(水) 忘年会

16日(金) 立教山友会、図書委員会
19日(月) 青年懇談会忘年会
20日(火) 募金委員会、雪崩勉強会、海外連絡委員会

21日(水) 三水会
22日(木) 婦懇研究会
今月の来室者三一九名

会員移動

改名

六四五六 佐藤 芳男→佐藤弥右衛門

除籍取消

四九七八 村石 幸彦

名誉会員

九三〇 吉沢 一郎
一一一七 今西 錦司

永年会員

一〇二四 後藤 幹次
一〇三一 武村市太郎
一〇三三 藤島 玄

一〇三八 笠原潤次郎
一〇四六 角田 吉夫

一〇四九 津田 周二
一〇五九 大沢伊三郎

ルーム日誌 (53年1月)

11日(水) 理事会 総会

13日(金) 図書委員会引越準備会

20日(金) 指導委員会

22日(日) 引越準備

29日(日) 新ルーム移転

今月の来室者一七八名

会員移動

退会

三〇三八 安藤 好男

六四七六 増田 正勝

四二六六 牧野 四子吉

四一七六 牧野 文子

支部変更

七九二〇 三浦 幸一 (東京→山形)

名称変更

四五三六 東京写真大学短期大学部山岳部→東京工芸大学短期大学部山岳部

改姓

七六七 荒山 文子→上野

第2回

JACノミの市の

お知らせ

昨年好評を得ましたノミの市を今年も10月末に開催します。昨年の経験とみなさまからの貴重なアドバイスをもとに、より一層充実した楽しい催しにしたいと考えています。左記要領により出品ご協力をお願いいたします。

△出品物受付期間▽5月1日より10月10日まで

△出品方法▽提供者名、希望価格(オークション用の場合はその出品物の由来、希望底値)をご記入の上、原則としてルームへご持参ください。持参出来ない方、たくさんある方、大きい品物の場合などはルーム宛に一報ください。

△出品対象物▽山の道具、用品(新品・中古を問わず)を中心に、絵、写真、衣料、民芸品、日用雑貨その他何でも可。

△還元▽提供者に価格の80%を還元します。(20%は運営費に充当) (集委員会)

昭和五十三年四月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四 サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森 久雄

電話東京(加)四四三三

振替口座東京三二四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

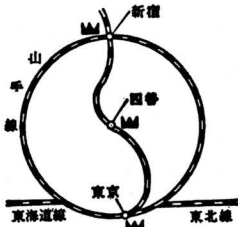
●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

信用と知識を売る
山の専門店

登山用具は
ぜひ
秀山荘
中央区八重洲2の1の11
☎281-8456

登山とスキー具

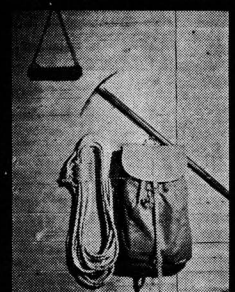
イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山・スキー用具の専門店
エーデルワイスマークの

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 ☎(03) (561) 3600
スキーショップ ☎(03) (561) 0966
吉祥寺近鉄店・吉祥寺近鉄7階 ☎(0422) (21) 3331(代)
大阪店・北区曽根崎1-2-8 ☎(06) (364) 0933(代)
梅田店・北区曽根崎2-7-2 ☎(06) (315) 7985(代)
大阪三越店・北店三越新館2階 ☎(06) (203) 1331
セブン店・北店中央セルシー1階 ☎(06) (833) 0123
福岡店・博多区須崎町1-4 ☎(092) (281) 3440



山の新聞

日本山岳会学生部編

年報第六号

判型21cm×20cm 二七六頁 定価三六〇〇円

●特集

「大学山岳部の原点を探る」
一九三二年の早大山岳部による積雪期滝谷から一九七六年の学生部の海外遠征ドウナギリ峰までの主な記録を特集したこれを基に、大学山岳部の原点を探り考察し、今後の部活動の参考にして貰いたい。
内容―滝谷ノナンダコートの初登頂ノ北鎌尾根独標側稜より北穂高往復ノ春の剣岳より西穂高ヘノ宇奈月より西穂高ヘノ利尻岳ノ白馬岳名剣尾根ノ大タテガビンよりハツ峰ノミヤールノナラノドウナギリ

エーデルワイス・クラブ編

ランタン紀行

75エーデルワイス・クラブ・ヒマラヤ・トレッキング報告

A五判一六〇頁 定価一五〇〇円
女性らしく細部にまで行きとどいている装備や食糧の報告、ランタン・ヒマールにある五二〇〇米の雪のガンジャ・ラ越えの記録、さらに感銘的なエーデルワイスとの出会い等、ここを訪れた人々にとってよい資料である。また二〇日間わたるキャラバン日記は親切なシエルバやポーターとのユーモアに富んだ交流が読んでいて実に楽しい。

日本山岳会編

一九七八年版 山日記

A六ボケット判 定価九五〇円 山行はもとより日常の手帳としても広く愛用されています。山党同志や親しい方への洒落た贈物として喜ばれています。プレゼントカードつき。

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1 電話03-291-9442 振替東京8-24723 ●お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。